

結婚・出産特集

もしも名前がなかったら：結婚

第5期 OB 千葉 貴宏

新型コロナウイルスの感染に注意せよ、と言われても、コロナウイルスがなんなのかもわからなければ、そもそもウイルスがなにかも、感染というものがなにかもわからないし、なにをもって新型と呼ばれるのかもわからない。対象がどのようなものであれ、名前を付けるというのは、便利である。名付けさえすれば、細かな解説を省いたうえでそのものを示すことができる。裏を返せば、名付けによって、そのものの正体がわからなくなったり、名付け対象が集団であれば、多様さが失われたりする、とも言えるかもしれない。自分の姓名を言えば自己紹介だと思ってもらえる。「私はオタクだ」の一言は、当人がなんらかのサブカルチャーにハマっていることを示してくれる。「私はLGBTだ」の一言で、細かく質問することが失礼だと周りは勝手に思ってくれるし、あれこれと尋ねてくることもなくなるかもしれない。そういった周りのありふれた反応が、オタクやLGBTへのまっとうな理解を妨げているのだらうと捉えられなくもない。巧妙なブランディングによって買い手が厳格な品質評価を下さなくなるのと同じである。

逆に、名前を持たないものは、重要な特性を晒す必要に迫られる。自己紹介するときに自分に名前がなかったら、こまごまとした自分の特徴について述べなければならぬだろう。見かけの特徴や趣味や年齢・経歴や職業やら、そういった類のことで、自分を表現しないとイケない。千葉貴宏という人間であれば、現在大阪府吹田市在住で30代半ば、趣味はテレビゲームで、メガネをかけていて天然か人工のパーマで、背はさほど高くなく、太ってはいない。私立の中学高校を卒業し、慶應義塾大学商学部へ進学した。大学卒業後も就職せず、同大学大学院へ進学し、博士後期課程を単位取得退学したのち、東洋大学経営学部の助教を経て、現在、関西大学商学部の准教授である。といった具体である。ここであらためて自分を成り立たせているものについて並べてみても、どれが重要な特性なのか、わかりそうにない。

もしも名前がなかったら、結婚というものは、私をよく表してくれるもののひとつであるかもしれない。2019年11月9日、結婚式を挙げた。私と会って話したことのある人であれば、私が結婚や結婚式からいかに遠い存在であるかということ直観するはずである。それにもかかわらず、私が結婚できたのは、まちがいなく、小野晃典先生のお陰である。ここに心からの深い感謝の意を表したい。私が大学学部時代を4年で終えていたら、大学3年生になる直前にサバティカル中だった小野先生のゼミには入れなかった。大学1年生のときに留年したことは、まさしく塞翁が馬であり、今でも偶然がもたらした奇跡だと感じている。留年したことを正当化するな、と言われてしまいそうなことではあるけれども。ともあれ、小野先

生と出会わなければ、確実に関西在住の千葉貴宏は存在せず、それはつまり、現在の結婚相手には巡り会えなかっただろう、ということになる。

自分ではない存在が自分の存在を明らかにしてくれるというのは、友人の少ない私からするととてもめずらしい。自分の見かけの特徴も趣味も年齢・経歴も職業も、言ってしまうと私が死ねば無意味である。さらに、私が愛した人も、愛したというだけではどこかに記録されることはないし、奇妙な誰かが100年後に私の遺伝子を解析したとしても、不明なままである。結婚は、そういった点でも興味深いものである。



結婚式の重要ポイントその1：子供



結婚式の重要ポイントその2：笑顔



小野先生のご祝辞